

パパのひみつ

有賀 佐知子

風りんが、ちりんとなった。

ぼくはふとんの上でうとうととしていた。

パパはまだ帰ってこない。

夏休みは終わったのに、毎日あつい。せん風きがぶんぶんまわっていても、やっぱりあつい。でももう、まぶたがおもくて、眠ってしまいそうだった。

早く帰ってきてよ。パパ。

ボタン――。

「ただいま、ナオキ。かえったぞ〜」

やっと帰ってきた。きのうの話のつづきを今日は、ぜったいにききたい。きのうはパパが寝てしまつて、きけなかったんだもの。

「おかえりなさい」

ぼくは、ふとんから抜けだして、パパにとびついた。ママは、テーブルにお皿をならべながらきく。

「シャワーの前に、むぎ茶いる？」

パパは首をふって、バスルームに向かった。ぼくも、パパの背中にくつついていく。

なぜって、パパのシャツのうしろから銀色のうろこのついた、しっぽがちらちらと見え
ていたからだ。ママに見られたら、大変だ。

あぶない、あぶない。

「パパ、ビールをのんだの？」

「お客さんあいてで、しかたなかったんだよ」

ふだんはお酒はきらいだと言っているけれど、「本当はいくらでものめるんだ」って、こっそり教えてくれた。パパの正体は、

「うわばみ」なのだ。

「うわばみ」は、ものすごく大きなヘビのことで、パパはそれをひみつにして、ママと結婚した。

でも、お酒をのむと、うわばみの体にもどりかけてしまう。今日も、シャツをぬぐと、
パパの体は半分ほど銀色になっていた。

「ああ、ごめん。フロからあがったら、できるだけ早くいくから」

しつぽをふりながら、パパはあやまった。正しくいうと、しつぽではなくて、体の一部分なのだそうだ。

ぼくはときどき心配になる。ぼくも、大きくなってお酒をのんだら、やっぱりしつぽが生えてしまうんだらうか。

それはイヤだな。へビになってしまったら、やっぱりママはおどろくだろう。

「コーヒーをのんで、しつかり目をさましてさ、今日は終わりまでちゃんと話すよ。」

パパは頭をかきながら、バスルームに入っていた。

「もう寝なさい。本なら、ママがよんであげるわ」

部屋にもどると、ママが本をもって待っていた。

「パパが お話をしてくれるって。きのう、やくそくしたんだ」

ぼくがことわると、ママは小さく笑った。
「ほんとうに、ナオキはパパが好きなのね」
ママのことも好きだけど、今日きく話は、
特別なんだ。

きのうの夜、パパが言った。

「ナオキも、来年は小学校だね。パパがママ
とはじめて会ったのは、二十五年まえの今日
だったんだ。話をききたいかい？」

もちろんぼくは「ききたい」とこたえた。

「ママは、もう忘れているだろうけれど」
と、パパはちよつとさびしそうな顔をして、
話しはじめた。

「まだ、パパがほんの小さなへビだったこ
ろのとき。道ばたのくぼみに落ちてしま
って、なかなかはい上がれなくて、こまって
いると、いたずら好きのネコがきて、パパの
ことをいじめだしたんだよ」

「うん」

「もう、ぜったいぜつめいさ。すると、学校
帰りの子どもたちが通りかかって……」

「うん、うん、それから？」

「ぐうううううう」

これから、つてときに、きこえてきたのは、大いびき。もう、がっかりだった。

つづきは？ ネコは？ パパは、どうやって人間になったの？

ききたいことが、いっぱいあったのに。

ぼくはごはんのときも、幼稚園であそんでいるときも、家に帰ってからも、気になってしかたがなかった。

だから、今日は、ぜったいに話をききおわるまで、ぼくは寝ないし、パパにもおきていてもらうんだ。

ふとんの中で、目をぱっちりとあけていると、バスルームのドアがあく音がした。

（パパが、おフロからあがった）

しっぽが目立たなくなるまでおフロに入っている、パパはときどき「ゆでうわばみになりそう」になる。今日は、だいじょうぶそうでよかった。すぐに、コーヒーのにおいが

ただよって来た。

パパがキッチンでママと、話す声がきこえてくる。ママの声は、うきうきとしている。

「今日、ナオキのランドセルを見にいったのよ。こい青色がいいんですって」

「もう、ランドセルを売っているのか。ナオキは 青色が好きだっけ？」

「それがね、ほんとうは銀色がいい、なんていうの。それはないわよ、って言ったら、じやあアオ。黒っぽい青がいいって。ぐんじょう色でいいのかしら」

「それは、しぶいな。にあうんじゃないか」
パパの声はうれしそうだ。

ぼくが ほしいのは、パパのしっぽと同じ色のランドセル。夜の月のあかりの下で、しっぽは黒っぽい青に光って見える。ぼくにも生えるとしたら、きっとそんな色だ。

ぼくの顔は、パパに似ていると言われる。髪の手が太くて、つむじがないところもそっくりなんだって。だから、きっとぼくもパパ

のように背が高く、首が長めのひよろっとした大人になるのだろう。

「ナオキ、おきてるか？」

つぎにパパの声がきこえたとき、ぼくは眠りかけていたらしい。

「もちろん おきてるよ」

あわてて汗をふくふりをして、口のはしよだれをふいた。

「パパ、今日は寝ちゃわないでよ。ネコにいじめられて、それからどうなったの？」

「しいっ……。ママにきこえないよう、小さな声でな」

パパは人さしゆびを口にあてて、ぼくの耳をそっと引っぱった。

「死にかけてる小へビなんて、子どもたちは、知らん顔さ。みんな通りすぎて行って、パパがもうダメだと思ったとき」

ぼくは、ぐつとにぎりこぶしをにぎる。

「女の子が走ってきて、ネコをおっぱらってくれたんだ。そして、ぐったりしていたパパ

を」

「助けてくれたんだね？」

「ちよっと、ちがうんだな。小枝でちよんちよんとつついて、それでもパパが動けないでいたら」

「えっ？」

「しっぽを、ひよいとつかんで、えーいって草むらに向かって投げたんだ」

「……その女の子が……、ママ？」

ぼくの眠気は、すっかりとんでしまった。

「そうだよ。パパは、はじめて空をとんだ。しんじられるかい？　ヘビだって空をとべるんだ。体を、こう『く』の字にまげてね。いや、どちらかというと『ゆみ』の字だったかな」

パパは、ぼくの手のひらに「弓」という字をかいた。

「パパはもう、ネコにいじめられなくなかった。三年たつてうわばみになったパパは、そのネコをひとのみで、のみこんでやった」

ぼくは、手のひらを見ながら「へえ」と言うしかない。

「ところがネコには、子どもがいたんだ。わるいことしちゃったな、と思っていたらまた女の子が来て、子ネコをひろって、トイレのしつけをして、かい主をさがしてあげたんだ」

「それも、ママだったの？」

「そうさ、パパが大きいうわばみになったころ、きれいになった女の子を見かけた。すぐに分かったさ。鼻がよくきく　うわばみだったからね」

　　パパはぼくの鼻を、つんつんとさわった。

「ナオキの鼻がいいのは、パパに似たんだな」

　　にやりと笑うと、舌がちろりとのぞいた。

「空もとべたし、うわばみにもなった。生きものにやさしい女の子に会って、好きになった。ところがその子は、へビだけはダメだったんだ。どうしても、さわれないんだって」

「だって、しつぽをつかんで投げたんでしょ？」

「せいっぱい勇気をだして、助けてくれたんだよ。パパはどうしても、その子と結婚したかったから、必死で人間になったのさ」

そのあたりをくわしくきいてみたい。

「どうやって人間になれたの？」

「そりゃあ、一生けんめいに願ったのさ」

「ほんとうに？」

「だって、うわばみのままじゃ、ママとは結婚できないしさ。人間の大人をしつかり見て勉強もした。本もよんで、人間の食べるものを食べた。ほかに、どんな方法があるんだい？」

ぼくは首をかしげる。思いうかばない。

「たとえば……人魚姫のように——声とか、大切なものと、こうかんする、とか……」

「パパの大切なものは、ママとナオキだ。なにとも、こうかんできないよ」

「そうなの？」

ぼくはうれしくなつて、パパにだきついた。
パパのしっぽは、すっかり消えている。

「ぐううううう」

パパの息は、いびきになっていた。

「もう、パパったら」

ききたいことは、もうきいたような気がするし、まだまだ足りない気もする。

「パパったら……くううう……」

ぼくの息も、小さいいびきになっていた。

夢のなかでぼくは、空をとんでいた。気がつくところっぽがはえていて、それで、とぶ方向まで変えることができた。

「すごいや、飛行機みたいに とぶこともできるんだあ」

ぼくは、こうふんして なんどもなんども雲の中に入ったり出たりした。ひんやりと冷たかったり、カミナリがピカピカ光っていたりして、たのしかった。

いきなり、まぶしい光につつまれた。

「パパ、ちゃんと自分のふとんで 寝てちよ

うだい」

ママの声が、きこえる。

「ああ、ママ、今おきるよ」

ねぼけたパパの声も、きこえた。

「あら、どうしたの。その、しつぽ……」

えっ？ とぼくは、おき上がろうとした。

「パパったら。しつぽがあるなんて！ まあ、
なんてことなの、ナオキまで！」

ママの声が、きんきんとひびく。ぼくはい
そいでおき上がろうとしたけれど、どうい
うわけか、体がうごかない。

「ああ。とうとうバレてしまった。ごめんよ。
ずっといっしょにいたかったけれど、バレて
しまったら、もう いっしょにはくらせない
……」

（えっ、そんなのイヤだよ）

ぼくはそう言おうとしたけれど、声も出せ
ない。

「パパ、行かないで。いいんだ、うわばみで
もいいんだ。空も、とべるんでしょ。いっし

よにいてよ」

ぼくは、ようやく出た声でさげんでいた。もちろんそれは夢の中でのこと。目がさめたとき、ぼくはびっしりと汗をかいていた。

窓のそとはすっかり明るくなっていて、今日も、あつい一日がはじまろうとしていた。

幼稚園で、ぼくはおちつかなかった。だれかにききたくて、しかたがない。ようこ先生のところに行つて、思いつきつてきいてみた。先生は、いつも絵本をよんでくれて、お話もいっぱい知っている。

「ねえ、先生。『ツルの恩返し』で、どうしてつるさんは正体がバレたら、ツルにもどつちやつたのかな？」

「まあ？」

ようこ先生は、丸いメガネのおくの目もまるくした。

「バレてもそのまま、いっしょに住んでもよかったのに。どうして？」

「うーくん、ナオキくんはツルと住みたい

の？」

「だって、ほかのツルとちがって、結婚しちゃったんだし。それから雪おんなの話も……」

ようこ先生なら、いっしょになかよくくらしただという話も知っているかもしれない。「雪女房の話ね。そうねえ、人間いがいのあいてとの結婚は、ばれたらおしまい、ってパーティーが多いわね」

先生は首をかしげる。

「でも、ばれても平気、かえって良かったという話もあるわよ。カエルになった王子とか、美女と野獣の野獣ね……。けっこうあるじゃない」

「いいんだよね？」

ぼくはうれしくなつて、小さくとび上がった。

「そうねえ、見ためより正体のほうが良ければいいのかな……。カエルも野獣も本当は王子さまだったものね」

こんどは、つまずきそうになった。
パパとウワバミ。どちらが良いかってこと。
六才のぼくには、むずかしすぎる問題だ。
それでもぼくは、いつものように友だちと
ブランコできようそうした。はしって、あそ
んで、おやつの時間にちよっぴり牛乳をのこ
した。

おむかえに来てくれたママも、いつもと同
じように元気だった。

でも、やっぱり心配は なくならない。
パパの正体がバレたら、ママとはわかれな
くちやいけないのだろうか。こわくて、きく
ことができない。

今日もパパの帰りはおそかった。

会社で引っこしをする人が多いので、お酒
をのむ かいすうも、ふえるみたいだ。しっ
ぽがバレてしまうかも、と、ますます心配に
なる。だから

「ナオキ、ずっと いっしょに出かけられな
かったから、こんど、広い公園に行こうな」

とパパがさそってくれたときは、うれしかった。

土よう日は、お天気が良かった。強い日差しの下で、庭のあさがおの青い色が、すずしげだ。ママが、大きなおにぎりを作ってくれた。

ママは土ようと日よう日の朝から昼すぎまで、パートをしている。

朝、三人で家を出て、ぼくたちは公園に、ママはお仕ごとに行つて、帰りの夕方にファミレスで、まちあわせだ。

「おくれないううに来てね。今日は、大切な話があるのよ」

ママがパパに言っているのが、きこえた。ぼくはドキリとした。ママはちよつとうつむいている。

(わるい話だったらどうしよう……)

ドキドキしてきた。パパはにっこり笑つて、「ちやんと行くよ」とこたえていた。

ぼくとパパは、電車のふたつめでおりて、

大きなアスレチックのある公園に行った。

パパにきいてみたい話はたくさんあったけれど、あそび始めたらたのしくて、ロープを伝ったりトンネルをくぐったりしているうちに忘れてしまった。

汗をふいて、水筒に入れてきたお茶をのみ、たらことおかかの入ったおにぎりを食べる。パパとママといっしょに、ずうつとこんな毎日がつづいていけばいいなと思う。パパはなにも心配していないようだ。だから、きつとだいじょうぶだろう。

夕方、ママとまちあわせたファミレスに向かっているとき、空がどんよりくらくなって、いることに気がついた。

なんだかイヤなよかんがした。

重い雲がひろがって、空は黒いところと明るいところに分かれていた。黒いところもやもやと動いている。

風の音もごうごうとなっているのが分かった。パパの顔がきびしくなった。

「ナオキ。わかるか？ 竜巻がくる……」

黒いもやもやは、あつという間に、空にむかっつてのびる。大きな竜になった。まわりの木もはげしくゆれている。

「たつまき……。ぼくたち、とばされちゃうの？」

「にげる。ナオキ」

パパはぼくを家の方へと、おした。

「パパは？」

パパは、にげようとせずに、竜巻をにらんでいる。黒い竜は、ゆらゆらとゆらめきながら、どこに行こうかと考えているようだ。きやあとというさけび声がきこえ、小さなゴミがまい上がるのはつきりと見えた。

「まずいぞ。竜巻はファミレスのほうに向かっている」

パパは走りだす。ぼくもあわてて追いかけた。

「ぼくも、いく。ママはもう、ファミレスのなかかもしれない」

「だめだ。ナオキは家に帰ってろ」

パパはぼくをこわい顔でにらんだ。

「窓をぜんぶ閉めて、フロのなかにかくれているんだ」

けれど、ぼくは泣きながらパパの手につかまった。竜巻は、ずんずん大きくなっていく。どこかの家の屋根が、とばされて高く上がった。

「これ以上、近づくとあぶない」

パパの足が止まったとき、スマートフォンのおよび出し音がなった。

「ママからだ。『今、ファミレスでまっています。ずいぶん風が強いけど、だいじょうぶ？』って。ママがあぶない！」

ぼくの手をにぎる力が強くなる。パパの予そう通り、竜巻はファミレスにむかって進んでいく。パパは、ぼくを大きな木の下につれていった。

「木につかまって、じっとしているんだよ」
低い声で言うと、すごいいきおいで竜巻に

走っていく。

「パパ！」

パパのうしろすがたが、いつのまにか長くなっていた。太いしっぽが、ゆれている。体の横はばも、ずうんと広くなり、ウロコがきれいに並んだ大きな背なかが見えた。

「ずごごごご」

なにかを、すいこむような音。空にむかつて黒い影がとんでいた。見たこともないくらい大きなヘビが、口をいっぱいにあけて竜巻を飲みこもうとしていた。

黒い竜は、にげようとしたけれど、ヘビのちからは強かった。折れた枝や葉っぱといっしよに、竜巻はふらふらとヘビの口のなかにすいこまれていく。

「ごごごお、ごごごご」

いくらうわばみが大きくなったって、竜巻なんか飲みこんだら、おなかが破裂してしまう。

「パパ。パパ、やめて」

ぼくが さけんでも、うわばみはすいこむ

のをやめない。空は少しずつ明るくなってきた。

わあわあとさわぎながら、にげていた人たちのうえに、とんでいたゴミがはらはらと落ちてくる。

風がやんだ、とぼくにもわかった。

こわごとと空を見ると、黒い雲はすっかり消えていた。

「パパが、ぜんぶ飲みこんでくれたんだ」
明るくなった空のまんなか、まん丸にふくらんだ大きなへびが浮かんでいた。うんと高いところについて、すごく大きいことがはっきりとわかった。

ふしゅうううう。

こんどは、へびの口から空気がもれて、へびは空気のぬけた風船のようにくるくると空をまいながら、しぼんでいく。

「パパあ！」

ぼくはさけびながら必死に追いかけた。でもへびのとんでいくのはとても早くて、追

つけなかった。小さくしぼんでしまったパパは、どこに行ってしまったのだろう。

悲鳴もきこえなくなって、かわりに町の人たちのざわめきがきこえてきた。

「すごい風だったね」

「あれ、竜巻じゃね？」

「でも、急にきえちゃったよ」

「自てん車、とばされちゃってるよ。ああ、木もたおれてる」

まわりはざわざわと　うごき始め、ぼくはぼんやりと木につかまっていた。

パパが落としていったスマートフォンからは、よび出し音がなっていた。ママからだつた。

ぼくはファミレスでママと会って、パパをまった。スパゲティを食べながら一時間まつたけれど、パパは来なかった。

夜、テレビでは竜巻のニュースをしていた。でも、パパのすがたは　どこにもうつついてい

ない。

「こわかったわねえ。まっすぐに来たら、フ
アミレスの屋根も とばされていたと思う
わ」

ママはしんみりと言う。

「パパは、どこに行っちゃったのかしら」

「うん……」

見たことを話したいけれど、そうしたらパ
パのひみつもバラさなくてはならない。

「ママ、今日は大切な話があったんだよね？
それってなんだったの？」

ドキドキしながらきいたけれど、ママは
「パパがいなくちゃ、言えないわ」と首をふ
った。

「ひみつなの？」

「そうね。パパが帰ってくるまで、ひみつ、
かな」

ママもパパが帰ってくるとしんじているよ
うだ。ぼくはちよっぴり安心した。

「明日はママ、パートを休むわ。パパがケガ

をしているような気がするの」

うん、とぼくもうなずいた。パパはぜったいに帰ってくる。

ついさつき、気がついたのだ。やっぱりぼくの鼻は、良くきくみたいだ。パパが近くに
いるのが、なんとなく分かった。

もうナオキはねなさいと言いながら、ママはパパのパジャマを出した。パジャマがもそり
と動いてママは「あら？」とのぞきこむ。

「きやあ！」

大きな悲鳴に、ぼくがおどろくと

「こ・こ・こんなところに、ヘビ！」

パジャマといっしよに、糸くずのようなものがとんできた。しなしなにしぼんでミミズよりも小さくなっていたけれど、うろこの色で
パパだとわかった。

ぼくは、そつとひろって手のなかにつつまこむ。小さくなくても、青っぽい銀色のうろこは
きらきらときれいだった。

「おかえりなさい。すごいな。竜巻はのみこ

んじやったし、小さくなっても、また空をとんだね」

ぐったりとしながら、へビは ちろりと糸のような赤い舌をだした。ぼくには、うなずいているように見えた。

パパは、日よう日の朝には、ふとんの中でぐうぐう寝ていた。

ぼくもママもホツとした。でもとてもつかれていたようで、その日は一日ねむっていた。

ママはその日の夜、パパにえだ豆を出しながら言った。

「ムリはしないでね。でも、がんばってもらわないと。で、大切なことです。今から、はっぴようします」

ママはまっすぐに立って、むねをはった。

「じゃーくん。ナオキに、おとうとか、いもうとが、できることになりました」

えっ、とぼくは とび上がった。

「ひみっ、ってそのこと」

「うれしいひみつは、うちあけるタイミングが大事なのさ。パパもとても、うれしいよ」
パパは お酒ものんでいないのに、顔を赤くして本当にうれしそうだ。

おとうとか、いもうと。おにいちゃんになるのは、ちよっぴりくすぐったい。

でも、うまれてくる赤ちゃんにも、しつぽが生えるのだろうか。やっぱり、ちよっぴり心配だ。

ママのおなかがビーチボールのように大きくなったころ、ぼくは小学校に入った。

庭では、チュリーツプがまん開で、ちようちよが ひらひらとんでいる。

ぼくが使っていたというベビーベッドを出しながら、ママがやさしい声できいた。

「ひみつの話だけど、きいてくれるかな？」
また、ひみつだ、とぼくは、ときどきしながらうなずいた。

「ねえナオキ、もしも赤ちゃんにしつぽが生えていても、おどろかないでね」

赤ちゃん用のふとんをもったまま、ぼくは「えええっ？」と、さげんでしまった。

「ナオキもね、赤ちゃんだったとき、ミルクを飲みすぎると……しっぽが生えたの。とってもかわいい、しっぽ」

ママの笑った顔は、きらきらしている。

「うん。だいじょうぶ。きつとしっぽも、かわいいと思う」

ぼくも、ホツとしながら笑っていた。

「でも、ママはヘビとかは苦手で、さわれなかったんじゃないの？　平気なの？」

ママは首をふった。

「むかしはダメだったけど、今はだいじょうぶ。ナオキのしっぽが、かわいかったから、なれちゃったみたい。ヘビだって、もう平気。でも、このあいだはおどろいて、投げちゃったけどね」

そうだったんだ、とぼくは安心した。

しっぽが生えていても、赤ちゃんは、きつとかわいい。

小学校に入ってから牛乳をちよっぴりの
こしてしまふけれど、ぼくはぼくだし。

それに、たぶんママはもうパパのひみつを
知っているような気がする。知っているから、
赤ちゃんのしつぽをかわいいと言うのだろう。

やっぱりパパの選んだママはすごいなと思
う。

でも、もしもぼくに大きなしつぽが生えた
ら、やっぱりひみつにしておこう。

なぜって、ひみつは、とってもドキドキす
るんだ。

そして、バレてもだいじょうぶな ひみつ
は、ほんとうに たのしいのだから。